

## 『明暗』における会話の勾配

エマニュエル・ロズラン

Conversational Difficulties in *Meian (Light and Dark)*

Emmanuel LOZERAND

## Abstract

*Meian (Light and Dark)* primarily consists of conversations between its characters. However, the majority of these conversations are not harmonious. The narrator frequently makes reference to this and even uses the phrase “conversation gradually became more difficult” in relation to a discussion between the characters, O-Nobu and Tsugiko.

Based on an analysis of the awkward conversations at the beginning of the novel between Tsuda and the doctor, this paper shall clarify several aspects of the “conversational sickness” that is a central element of this work. It will then consider whether the propositions developed are applicable to the novel as a whole.

『明暗』における会話は、非常に重要な要素です。その理由は四つ考えられます。

まず、一つ目の理由は、この作品自体が、主に三十ほどの会話の連続として構成されていることです。

二つ目の理由は、物語そのものが、主としてこれらの会話をとおして進展することです。しかも、これらの会話は、他の会話について、あるいは他の会話からの発展として構築されています。

三つ目の理由は、これらの会話が語り手によって様々な言葉で呼ばれていることです。語り手は、会話を「話、会話、対話、問答、議論、喧嘩」と呼ぶのです。それと同時に、語り手はしばしば会話の性格に説明を加え、例えばお延と継子の会話について、「だんだん勾配の急になって来た会話」（「七十二」）という表現を用います。また、お延と小林の間の会話の例のように、その展開が特殊である場合には、「特殊の経過をもったその時の問答」（「八十三」）といった表現も見られます。つまり、『明暗』は、会話についてのメタ・ディスクール、言い換えれば、一種の会話論の実行例なのです。

そして、会話が非常に重要な要素であると先程述べたのは、会話が中心的なテーマの一つであり、複

数の点においてこの作品自体を会話についての小説として読むことができるからです。より詳しく言えば、この作品は、会話についての小説であるとともに、その不調和、あるいはその病についての小説です。

不調和、病といった言葉をなぜ用いるのか説明しますと、それは、単にこの作品にはほぼまったくと言っていいほど、うまく運ぶ会話がないからです。その「三十二」で津田が藤井家での会話を「堰き止め」たあとで、「重苦しい空気の影響」を感じるときのように、言葉が「麦酒の泡と共に消えてしまう」ことはないのです。稀な例の一つは、津田が小説の最後の部分で山へ向かうときに乗った軽便鉄道の二人の乗客の「興味本位の談話」（「百六十八」）でしょう。

これとは逆に、小説の中の約三十の会話のほぼすべてが、「勾配」があり、もっと簡単な言葉を使うと、「下り坂」を辿っています。これらの会話は、不快感、問題、葛藤を含み、さらには喧嘩にまで発展することもあり、そうでなくても、しばしば途切れたり、脇道にそれたりします。

このような会話の負のベクトルについての分析をおこなうにあたって、まず、その最初の例である津田と医者との会話についての考察から始めたいと思います。この会話は、この点から言うと、この小説の典型的な始まり、言い換えると「真の序奏」となっており、重要な分析対象です。次に、この最初の部分の分析から、どのような一般論を導き出せるか考えてみたいと思います。

『明暗』のその「一」は、かなり興味深いものです。冒頭から津田が置かれている状況ほど微妙な状況に主人公が置かれている小説が、世界中のどの他の小説にあるでしょうか？ 身体の、ある部分の問題についての医者と患者の会話から始まる小説など、世界中を見ても他に例があるでしょうか？

とはいえ、その「一」、そして小説自体が会話から始まるわけではなく、語り手の言葉である「医者は探りを入れた後で、手術台の上から津田を下した」という短く、明快で、的確であると同時に省略的な文章から始まります。この文は、医者、津田という名の患者、手術台、つまりは診療所を示すことによって、はっきりと状況を描写しています。それと同時に、謎に包まれてもいます。なぜなら、この文を読んでも、特に患者がどのような検査を受けたのかははっきりとわからないからです。

ここから発展する会話は、背景のない、宙づりの会話ではありません。小説が進むにつれてすぐにわかるように、白衣を着た医者と最初は服をまだ着ておらず、それからある程度時間をかけて着ることになる患者との間の、明確な場面での会話なのです。患者は、このあとで、帯をしめますが、手に取った袴はまだはいておらず、この動作はこの章の中のそれなりの部分を占めています。そして、この患者は不快な検査を受けたばかりなようです。彼は身体の、ある部分に「探りを入れ」られ、「癍痕の隆起」を「がりがりかき落と」されたのですから。

では、テキストの展開に戻しましょう。最初の文のすぐあとで、一つの声が現れます。会話文の引用を示す助詞「と」も会話文であることを示す発話に関する動詞もない文として現れるのです。つまり、誰のものか不明な声なのですが、「やっぱり穴が腸まで続いているんです。」という診断によって、すぐに医者のものだとわかります。この発言は肯定であり、「やっぱり」という言葉が示すように確信

を表しています。とはいえ、その次に医者が言うのは、以前は「ついそこがいきどまりだとばかり思って、ああ云った」けれども、実は間違っていたということです。この間違いにはおそらく正当な理由があり、それは、偶然にも少々複雑な「痕跡の隆起」という漢語で説明されます。しかし、ここで重要なのは今日医者は「まだ奥がある」と言い、同じような状況の中で、以前は「ついそこがいきどまりだ」と言ったということです。つまり、まったく正反対のことを言っているわけです。この点は非常に重要です。なぜなら、この最初の発話は、この瞬間以降に医者が言うであろうことの信憑性に疑いをもたらすことになるからです。

最初の診断を下したあとで、医者は結論を言わずに過去のことへ脱線して、患者の方が医者に秩序を取り戻させることになります。こうして、患者は医者が言わなかったその発言の論理的な続きを、すでに使われた言葉をほぼそのまま使うことによって、「そうしてそれが腸まで続いているんですか」と、自分で言います。

すると、医者は自分の診断を数字を示しながらより詳しく説明しますが、ここでもまた自分が間違っていたということを繰り返します。「まだ奥がある」という表現は、ここで「五分ぐらいだと思っていたのが約一寸ほどあるんです」という説明に変わります。とはいえ、医者はやはり自分の診断の結論を言わず、津田の期待に応えません。

この最初のやりとりは、短いとはいえ、示唆に富んでいます。医者は不快な診断を告知しつつ、同時に過去の過ちを告白します。その一方で、病状の説明も施すべき治療も示さず、患者を不安の中に取り残します。その上、医者の言葉の中には、まったく同情の色が見られないのです。

この会話における小さな破局は、『明暗』の中でよくあるように、登場人物の間のしばしの沈黙へとつながります。このような沈黙は、この小説の中では大抵視線のやりとり、身体や顔の動きをとともなう意味深な沈黙です。登場人物が多弁であるゆえに『明暗』は実に饒舌な小説である一方、沈黙の小説でもあります。なぜなら、この大量に発される言葉は、しばしば不十分、期待外れ、ひいては欺瞞に満ちており、言葉は沈黙に取って代わられるのです。

次に現れる描写の段落は、津田の顔と医者の顔の描写の間で行ったり来たりします。津田の顔には二

重の表現が見られます。津田は苦笑しながらも失望の色をのぞかせますが、これはこのあとに何度も現れることになる津田の苦笑のうちの最初のもので、この小説の中に、彼の苦笑は35回現れます。(二度目はその「三」の「津田は細君の顔を見て苦笑を洩らした」という文に、つまり津田が妻と一緒にいるときに現れます。) 医者顔、そしてより広義に彼の身体的な挙動は、津田の目をとおして詳細に描かれます。これらは、津田の視点から解釈され、実際のやりとりが不在の一種の沈黙の会話となっています。とにかく、顔は『明暗』においては常に現れる要素です。「顔」という言葉は、小説の中に274回現れます。そして、非常にしばしば疑惑、疑問の対象です。

また、この章は、明らかにこの小説全体の語り手の位置の問題を提起しています。漱石の小説が二つのカテゴリーに分けられることはよく知られているところです。『吾輩は猫である』の「吾輩」や『草枕』の「余」、『坑夫』の「自分」、『坊っちゃん』の「おれ」、『こころ』の二人の「わたくし」のように一人称で語る存在感の強い語り手が存在する小説と語り手の存在感が弱い小説です。『明暗』のような小説では、語り手の存在が薄いとはいえ、不在なわけではなく、重要な役割を果たしてさえいるのです。津田に焦点を置く一方で、津田から距離を置いて、この人物を外側から観察することもあるのです。

とにかく、本来なら医者顔の義務であるゆえ、再開すべきである会話の進行には、この沈黙は役に立ちません。そのため、津田は再び「腸まで続いている」という同じ言葉を繰り返さざるをえません。しかし、今度は「とすると」という表現でつなぎ、彼にとって問題となる唯一の質問、つまり診断の結論を導くためです。当然のことながら、津田はこの結論を悲観的な方向に想像して、「癒りっこないんですか」と続けます。

それに対する「そんな事はありません」という医者の答えは曖昧さのないものであるにも関わらず、患者を安心させることはできません。医者顔のこの最初の慰めの言葉は発されるのが遅れただけでなく、請われることによってやっと出てきたのです。それに、津田は完全に安心するわけにはいきません。医者は最初に間違っただけですから。その上、語り手はこの医者の弱い立場を曖昧な解説を加えることによって、さらに弱くします。

医者は活潑にまた無雑作に津田の言葉を否定した。併せて彼の気分も否定する如くに。

なぜ医者は「活発」と「無雑作」を重ね合わせるのでしょうか。医者が本当に否定しているのは、「津田の言葉」なののでしょうか。それとも「彼の気分」なののでしょうか。それが明らかになることはありません。疑問は生み出され、維持されたままなのです。

医者は言葉を続け、やっと説明し、患者を安心させようとしています。

「ただ今までのように穴の掃除ばかりしては駄目なんです。それじゃ何時まで経っても肉の上りこはないから、今度は治療法を変えて根本的の手術を一思いに遣るより外に仕方ありませんね」

しかし、その中で医者はコミュニケーションの過ちを繰り返します。まず、病気の深刻さを否定するのに、これから言うことの内容を弱める「ただ」という前置きから始めるのです。そして、不安を煽る言葉を連発します。「根本的の手術」「一思いに」「やるよりほかに仕方ありませんね」といったこれらの言葉は、その強さによって不安を煽るのですが、それだけでなく、曖昧でもあり、根本的なことは何も明らかにしていないのです。

そこで、津田は「根本的の治療と云うと」と訊き、根本的かつ具体的な説明を求めざるをえません。

医者の答えは、再び「医学的見解に基づいたもの」で、それは最悪の事態を招きかねないものです。医者の説明は、危険なほど正確であると同時に、まったく明快さに欠けるのです。それゆえ、不安を催す想像をかきたてます。この小説の英語への翻訳者であるナサン氏の見解がどのようなものであるかは存じませんが、次の部分はフランス語へ訳すのが非常に難しい部分です。

「切開です。切開して穴と腸と一所にしてしまおうんです。すると天然自然割かれた面の両側が癒着して来ますから、まあ本式に癒るようになるんです」

特に「穴」という言葉は、一筋縄ではいかない問題

をはらんでいます。

それはさておき、「本式に癒るようになるんです」という部分で再び医者が表明する確信には、説得力がありません。なぜなら、先程述べたように、この医者はすでに自分の間違いを認めていますし、その上彼がついもらす「まあ」という言葉が、自分自身の説明を弱めてしまっているのです。

津田は、再び沈黙するしかなく、「黙って點頭」きます。医者の方では、津田の沈黙を破るべく、はたらきかけるわけでもありません。

ここで、この沈黙に前の物よりも長い新しい部分が介入してきます。津田による顕微鏡、そして細菌の描写に始まって、語り手は時間をさかのぼります。それによって、人物の心理、もろさ、疑念を説明することができるのです。

ふとこの細菌の事を思い出した。すると連想が急に彼の胸を不安にした。

すると、この沈黙から避けたい質問が浮かんできます。当時のもっとも恐れられていた問題に関する質問、つまり結核についてです。

「もし結核性のものだとすると、仮令今仰しかったような根本的な手術をして、細い溝を全部腸の方へ切り開いてしまっても癒らないんでしょう」

医者の答えはこれまでのものに比べて、いっそう驚くべきものです。彼は、心配している患者を前にしていることを忘れて、まるで他の医者と理論について話しているかのように、純粹に論理的な回答にとどまって、言います。「結核性なら駄目です。」そして、それだけでなく、より細かい説明さえ加えます。「それからそれへと穴を掘って奥の方へ進んで行くんだから、口元だけ治療したって役にゃ立ちません」それから、何だというのでしょうか？

それから、医者は黙ります。そして、津田はまたもや疑いの中に取り残されます。

こうして、津田は再び自分から言い出さなければならず、言います。「癒りっこないんですか。」と前に訊いたように、医者にはっきりと訊きます。「私のは結核性じゃないんですか。」

そして、前の答え（「そんな事はありません」）と

同じように、医者ははっきりと否定して言います。

「いえ、結核性じゃありません。」

もっとも、前と同様、医者は安心させることができません。医者の言葉は、前にも述べたように、信頼できるものではなく、それだけでは十分ではないのです。語り手は、すぐに津田の疑いに満ちた態度を描写し、このことを裏付けします。

津田は相手の言葉にどれほどの真実さがあるかを確かめようとして、ちょっと眼を医者の上に据えた。

医者が黙ったままで患者を安心させようとしません。ですので、患者の方が、その証拠を求めて言います。「どうしてそれが分るんですか。ただの診断で分るんですか」

すると、医者は「ええ」というぞんざいな返事をします。おそらく彼は少々いらだち、少々尊大な態度で、「ええ。診察の様子で分ります。」と言います。とはいえ、この医者は最初の診断を誤ったのではなかったでしょうか。また、顕微鏡が、人の目には隠された世界の存在を示唆しているのではないのでしょうか。

ところが、会話はまた別の存在の条件が想起されることによって、急に打ち切られます。病人は診療所で一人ではないのです！彼は複数の病人の中の一人でしかなく、彼に与えられた時間は限られています。

津田は、疑いを抱いたまま、医者の判断に任せるより仕方ありません。こうしてみると、「電車に乗った時の彼の気分は沈んでいた」というその「二」の始めは、読者にとって驚くべきものではありません。

この第一章の分析によって、『明暗』の会話が辿る「下り坂」、その急な「勾配」について、何が明らかになったのでしょうか。

1. 一つ目は、会話はほぼ必ず特殊な場面で交わされ、非常に具体的なことから、しかも必ずしも快くないことがらと関わっています。そして、それは、必ずしも対等な関係にない登場人物たちの間で交わされ、力関係の影響のもとにあるのです。
2. 二つ目は、相手を傷つける言葉、避けるべき言

葉、言い換えるべき言葉、婉曲に言うべきことがあるということなのです。

3. 三つ目は、沈黙、そして言われるべきなのに言われない言葉があり、これも傷つけるということなのです。

4. 四つ目は、非言語コミュニケーションが重要な役割を果たしますが、それが信頼を打ち壊してしまう言葉や沈黙によって引きおこされた損害を補填することができるわけでは、必ずしもないということなのです。

5. 五つ目は、会話は調和を生み出す術、他人のリズムに自分のリズムを調節する術であり、タイミングを間違えることなどによって生じるずれは、好ましくない結果をもたらすということなのです。

6. 六つ目は、重要な問題とは、信頼の問題、信頼をいかに築くかという問題、信頼を築くために必要な条件とは何かという問題だということなのです。ところが、言葉の信憑性を疑問に伏してしまいかねない、やってはいけないことがあります。例えば、確信と過ちの告白を混ぜること、極端な正確性と曖昧な部分を混ぜることです。そして、より広範には、思いやりに欠けること、つまり、人が自分の世界に閉じこもり、他人の論理や心配を無視することです。

これらの点を小説全体に当てはめることができるでしょうか。

まず、『明暗』は、始まりと同じように、会話の困難のうちに終わります。ここでは、またもや津田と、そして今度は清子との会話です。

「百八十七」の始めに、二人の登場人物は、意に反して、彼らの会話がやはり「下り坂」を辿っていることに気づきます。

しばらくして津田はまた顔を上げた。

「何だか話が議論のようになってしまいましたね。僕はあなたと問答をするために来たんじゃないのに」

清子は答えた。

「私にもそんな気はちっともなかったの。つい自然其所へ持って行かれてしまったんだから故意じゃないのよ」

「故意でない事は僕も認めます。つまり僕があんまり貴女を問い詰めたからなんでしょう」  
(「百八十七」)

状況は多少よくなりますが、小説最後の文、つまり漱石にとって最後の文は、相手の言葉も微笑も理解できずに当惑している津田を描いています。

津田は驚ろいた。

「そんなものが来るんですか」

「そりゃ何ともいえないわ」

清子はこう言って微笑した。津田はその微笑の意味を一人で説明しようと試みながら自分の室に帰った。(「百八十八」)

「病的な会話」、あるいは困難な会話というテーマは、つまり作品全体に共通するのです。そして、第1章の「病の会話」は、作品全体の「会話の病」を予告しているのです。

では、第1章についてすでに述べた点に関して、より詳しい説明を試みることにしましょう。

1. まず、会話は常に力関係が関わってくる場面やその枠組みのなかで交わされるという点です。

このことは、小説全体に現れています。例えば、まず間もなく手術を受ける状態から、手術を受けたばかりの状態へと移行した津田は、「創口へガーゼを詰めたまま」(「四」)ですが、これは非常に不快な状況に違いありません。

力関係について言えば、非常に早い時期から示されています。例えば、津田の甥の真事が、岡本の息子の家には遊びに行かないと説明するときです。

津田は漸く気が付いた。富の程度に多少等差のある二人の活計向は、彼らの子供が持つ玩具の末に至るまでに、多少等差を付けさせなければならなかったのである。(「二十四」)

貧富、権力、知識、才能の差は、小説の中の会話の大部分に影響するのです。

2. そして、人を傷つける言葉に関しては、数々の例が見られます。例えば、藤井家で、津田はお金の結婚について無責任な発言をします。

「それでよく結婚が成立するもんだな」

津田はこう言って然るべき理窟が充分自分の方にあると考えた。それをみんなに見せるため

に、彼は馬鹿々々しいというよりもむしろ不思議であるという顔付をした。(「二十九」)

その結果は、次の章である「三十」の最初にはっきりと現れます。

それでも座は白けてしまった。今まで心持よく流れていた談話が、急に堰き止められたように、誰も津田の言葉を受け継いで、順々に後へ送ってくれるものがなくなった。

小林が真事の空気銃について触れ、場を和ませようとするものの、一同の雰囲気はぎこちなくなってしまいます。

空気銃の御蔭で、みんながまた満遍なく口を開くようになった。結婚が再び彼らの話頭に上った。それは途切れた前の続きに相違なかった。けれどもそれを口にする人々は、少しずつ前と異った気分によって、彼らの表現を支配されていた。(「三十」)

そして、「三十一」では、叔父の藤井は、甥である津田と自分の妻の話し方に驚きを表します。

「大分八釜しくなって来たね。黙って聞いていると、叔母甥の対話とは思えないよ」  
二人の間にこうやって割り込んで来た叔父はその実行司でも審判官でもなかった。  
「何だか双方敵愾心を以ていい合ってるようだが、喧嘩でもしたのかい」(「三十一」)

つまり、何かが本当に壊れてしまったのです。

食後の話はもうはずまなかった。とって、別にしんみりした方面へ落ちて行くでもなかった。人々の興味を共通に支配する題目の柱が折れた時のように、彼らはてんでんばらばらに口を開いた後で、誰もそれを会話の中心に纏めようと努力するものがないのに気が付いた。  
(「三十二」)

そして、お延を動揺させるために、おそらくは故意に小林が用いた言葉についても同様のことが言え

ます。この言葉の結果はそれぞれが押し量ることになります。

「そりゃあなたは固より立派な貴婦人に違いかも知れません。しかし——」

「もう沢山です。早く帰って下さい」

小林は応じなかった。問答が咫尺の間に起った。

「しかし僕のいうのは津田君の事です」

(「八十八」)

3. 小林とお延が登場するこの場面は、また、沈黙が有害な役割を持つことを示す例でもあります。小林は、津田について匂わせたことがらをはっきりと説明せずに、去ろうとします。そこで、お延は小林を引き留めますが、小林はそれ以上言おうとしません。

「お待ちなさい」

「何ですか」

(中略)

お延の声はなお鋭くなった。

「何故黙って帰るんです」

(中略)

「あなたは私の前で説明する義務があります」

「何をですか」

「津田の事をです。津田は私の夫です。妻の前で夫の人格を疑ぐるような言葉を、遠廻しにでも出した以上、それを綺麗に説明するのは、あなたの義務じゃありませんか」

「でなければそれを取消すだけの事でしょう。」

(中略)

「そうしたらいいでしょう」(「八十八」)

これは、言われたことと言われなかったこと(言い過ぎたことと十分言わなかったこと)の寄せ集めであり、お延を完全に打ちのめしてしまいます。

お延は何時までもぼんやり其所に立っていた。

それから急に二階の梯子段を駆け上って、津田の机の前に坐るや否や、その上に突っ伏してわっと泣き出した。(「八十八」)

4. 非言語コミュニケーションについても、小林とお延の場面には、複数の興味深い例が見られます。

例えば、「八十五」の最初の部分です。

小林の顔には皮肉の渦が漲った。進んでも退いてもこっちのものだという勝利の表情がありありと見えた。彼はその瞬間の得意を永久に引き延ばして、何時までも自分で眺め暮したいような素振さえ示した。

「何という陋劣な男だろう」

お延は腹の中でこう思った。そうして少時の間凝と彼と睨めっ競をしていた。すると小林の方からまた口を利き出した。

「八十八」の最初の部分はさらに興味深い部分です。

二人の顔は一尺足らずの距離に接近した。お延が前へ出ようとする途端、小林が後を向いた拍子、二人は其所で急に運動を中止しなければならなかった。二人はぴたりと止まった。そうして顔を見合せた。というよりもむしろ眼と眼に見入った。

その時小林の太い眉が一層際立ってお延の視覚を侵した。下にある黒瞳は凝と彼女の上に据えられたまま動かなかった。それが何を物語っているかは、こっちの力で動かして見るより外に途はなかった。

明らかに、お延は小林と張り合える器ではないのです。

5. 会話のリズムのずれに関しては、劇場でのお延と吉川夫人の会話の例があります。

周知のように、お延は楽しみにしていたこの芝居に行くために、器用に振る舞います。語り手は、劇場へ向かう人力車の中の彼女をこう描写します。

ふっくらした厚い席の上で、彼女の身体が浮つきながら早く揺くと共に、彼女の心にも柔らかで軽快な一種の動揺が起った。それは自分の左右前後に紛として活躍する人生を、容赦なく横切って目的地へ行く時の快感であった。

(「四十五」)

しかし、この日の外出はお延の予想どおりにはい

きません。特に食堂で会話の巧みな吉川夫人の正面の席に着く場面がそうです。

社交に慣れ切った夫人も黙っている人ではなかった。(「五十二」)

こうして、お延は吉川夫人と話すきっかけをつかむことに失敗するのです。

調子の好い会話の断片が、二、三度二人の間を往ったり来たりした。しかしそれ以上に発展する余地のなかった題目は、其所でぴたりと留まってしまった。二人の間に共通な津田を話の種にしようと思ったお延が、それを自分から持ち出したものかどうかと遅疑しているうちに、夫人はもう自分を置き去りにして、遠くにいる三好に向った。(「五十二」)

お延は、すぐに太刀打ちできないことを悟ります。

三好を中心にした洋行談が一仕切弾んだ。相間々々に巧みなきっかけを入れて話の後を釣り出して行く吉川夫人のお手際を、黙って観察していたお延は、夫人がどんな努力で、彼ら四人の前に、この未知の青年紳士を押し出そうと試みつつあるかを見抜いた。(「五十三」)

彼女はこの談話の進行中、殆んど一言も口を挟きむ余地を与えられなかった。自然の勢い沈黙の謹聴者たるべき地位に立った彼女には批判の力ばかり多く働いた。卒直と無遠慮の分子を多量に含んだ夫人の技巧が、毫も技巧の臭味なしに、着々成功して行く段取を、一步ごとに眺めた彼女は、自分の天性と夫人のそれとの間に非常の距離がある事を認めない訳に行かなかった。(「五十三」)

そして、お延は吉川夫人に不意打ちされます。

お延がこう考えていると、問題の夫人が突然彼女の方に注意を移した。

「延子さんが呆れていらっしゃる。あたしが余り饒舌るもんだから」

お延は不意を打たれて退避ろいだ。津田の前で

かつて挨拶に困った事のない彼女の智恵が、どう働いて好いか分らなくなった。ただ空疎な薄笑が瞬間の虚を充たした。しかしそれは御役目にもならない偽りの愛嬌に過ぎなかった。「いいえ、大変面白く伺っております」と後から付け足した時は、お延自分でももう時機の後れている事に気が付いていた。また遣り損なつたという苦い感じが彼女の口の先まで湧いて出た。(「五十三」)

その上、吉川夫人はとどめを一撃を加えます。

立ち上る前の一瞬間を捉えた夫人は突然お延に話しかけた。  
「延子さん。津田さんはどうなすって」  
いきなりこう置いて置いて、お延の返事も待たずに、夫人はすぐその後を自分でいい足した。  
「先刻から伺おう伺おうと思ってたくせに、つい自分の勝手な話ばかりして——」(「五十五」)

このような場面には、会話のテンポを相手に押しつけようとする、二人の人物の戦いが読み取れます。そして、この戦いでは、その片方、吉川夫人が勝利するのです。

#### 6. とはいえ、重要な問題は信頼の問題です。

すでに確認したように、この小説には発言の内容の信憑性を疑わせるような行為が現れます。例えば、手術の際に、医者 of 言うことを津田がほぼ信用していないことは明らかです。

「コカインだけで遣ります。なに大して痛い事はないでしょう。もし注射が駄目だったら、奥の方へ薬を吹き込みながら進んで行くつもりです。それで多分出来そうですから」  
局部を消毒しながらこんな事をいう医者の言葉を、津田は恐ろしいようなまた何でもないような一種の心持で聴いた。(「四十二」)

幸いにも、ことはうまく運びます。

局部魔睡は都合よく行った。(「四十二」)

しかし、津田は同時に妻の無関心にも苦しみま

す。医者 of 診察のあとで、手術を受けなければならぬと言われて動揺して、家に帰ると、ここで小説に初めて登場するお延は、文字通り彼に気づかないのです！そして、彼らの最初の会話はまったく壊滅的です。

津田は仕方なしにまた立ち上った。室を出る時、彼はちょっと細君の方を振り返った。  
「今日帰りに小林さんへ寄って診てもらって来たよ」  
「そう。そうしてどうなの、診察の結果は。大方もう癒ってるんでしょう」  
「ところが癒らない。いよいよ厄介な事になっちゃった」  
津田はこういったなり、後を聞きたがる細君の質問を聞き捨てにして表へ出た。(「三」)

その夜になっても、お延が理解を示さないという点で、変化はありません。

同じ話題が再び夫婦の間に戻って来たのは晩食が済んで津田がまだ自分の室へ引き取らない宵の口であった。  
「厭ね、切るなんて、怖くって。今までのようにそっとして置いたって宜かないの」  
「やっぱり医者の方からいうとこのままじゃ危険なんだろうね」  
「だけど厭だわ、貴方。もし切り損ないでもすると」(「三」)

このようなやりとりは、津田の不安をますます掻きたてるだけです。叔父の藤井も、そもそも吉川夫妻や小林と同様、津田に対する理解を示すわけではありません。

そうはいっても、津田は単なる被害者というわけでもないのです。小林が理解を求めるときには、それに応えようとしません。

小林の語気は、貧民の弁護というよりもむしろ自家の弁護らしく聞こえた。しかしむやみに取り合ってこっちの体面を傷けられては困るという用心が頭に働くので、津田はわざと議論を避けていた。(「三十五」)

津田の言葉は誰にでも解り切った理窟だけに、同情に飢えていそうな相手の気分を残酷に射貫いたと一般であった。数歩の後、小林は突然津田の方を向いた。

「津田君、僕は淋しいよ」

津田は返事をしなかった。(「三十七」)

そもそも、「嘘」という言葉はこの小説の中に60回も現れます。嘘、隠蔽というテーマは、作品全体の中で中心的な位置を占めているのです。このテーマは、街頭で津田とその甥が手品遣いを見物する場面の核となっています。この部分は一読すると特筆すべきことがないように思われます。しかし、津田が手品遣いの嘘をあげつらうとき、甥はだまされません。

「だってこの前もその前も買って遣るっていったじゃないの。小父さんの方があの玉子を出す人よりよっぽど嘘吐きじゃないか」(「二十二」)

つまり、津田は医者よりも信頼できる人物ではなく、少なくともこの手品遣いよりも信頼できるわけではないのです。

さらには、お延は芝居に、津田は温泉に行くために、夫婦がそれぞれ名人技級の嘘を披露するという点も見逃せません。嘘は、彼らにとって処世術とも言えるのではないのでしょうか。

時間が許すなら、夫婦げんかではなく、この小説唯一の本当のけんかである、「九十二」から「百二」にかけての、お秀と津田の間の兄妹げんかの場面に触れたかったのです。このけんかは、その後登場するお延を交えた三人のけんかへと発展します。

しかし、この小説の興味深い点は、おそらくまさに、すべてがそこに収斂するように思われる夫婦げんかが実際にはおこらず、彼らが驚くべき「妥協」(「百五十」)に徹することにあります。

津田とお延は「十分な知」を持ち、フランス思想家ブレイズ・パスカルが呼ぶところの「生半可な知者」です。ところが、彼らは、一方では吉川夫人や岡本のような会話の達人に動揺させられます。また他方ではお秀や特に小林のような、その場の状況を利用することに長け、そして特に会話の規則を無視してはばからない、行動が予想不可能な人物を前に

しても同じなのです。また、彼らは、彼ら自身の利己主義が引きおこす矛盾にも動揺するのです。こうして、会話が「下り坂」を辿るべく、すべての条件が満たされるわけです。とはいえ、実際に会話が「下り坂」に入り込むことも、それを悪化させることもありません。

その意味するところが、『明暗』は病的な会話の小説であるという以上に、病的な会話が悪化するのを防ぐものの小説である、ということだとしたらどうでしょう。

とすると、私の発表は本質から外れているということになるでしょう。

(原文：フランス語、日本語訳：下境真由美)